

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 15 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520316

研究課題名(和文)パスカルの時代における蓋然性と確実性に関する多角的研究

研究課題名(英文)A Synthetic Study of Probability and Certainty at the Time of Pascal

研究代表者

永瀬 春男(NAGASE, HARUO)

岡山大学・社会文化科学研究科・名誉教授

研究者番号：60135100

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円、(間接経費) 870,000円

研究成果の概要(和文)：パスカルにおける確実性と蓋然性の問題を同時代のなかで考察するため、数学、計算機、政治論、護教論等のテキストを検討し、問題の根底に秩序の弁別、侵犯、逆説という著者生涯のテーマが潜んでいることを明らかにした。幾何学、言語、政治制度などの安定した秩序は、その起源に遡るとき確実性を失い、他方、蓋然性はずの諸事象(身体、習慣、民衆など)が秩序の逆転によって確実性へと転化する点に、パスカル思想の独創性の一つが見出せる。

研究成果の概要(英文)：This study aims to clear up the problem of certainty and probability in Pascal's thought by analysis of his various texts such as scientific, political and religious works, and to point out at the basis of this problem a series of important conceptions which form one of his fundamental themes: distinction, violation, and reversal of "orders". While the stable orders of geometry, language or political regime, lose their certainty and start shaking if we bring their origin into question, the probability peculiar to the orders of body, custom, or people, turns into certainty by the reversal of the orders. This is one of the original features of Pascal's thought.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学(英文学を除く)

キーワード：仏文学 パスカル パンセ 確実性

1. 研究開始当初の背景

パスカルの時代は、普遍的理性と絶対的真理の概念を根底から揺るがすバロック的精神と、それに対抗して合理主義の制覇を目指す古典主義的精神のせめぎ合う時代であった。この相克は、哲学的局面においては懐疑論とその克服の問題として、政治論のレベルでは為政者の徳論争、あるいはマキャベリスムの是非論争として、証明論においては複数の確実性の区別として、護教論においては神の存在や靈魂の不死の証明問題、さらには「賭け」の議論として、道徳論においては「良心例学」の隆盛と「蓋然説」の主張として、歴史研究においては歴史解釈と歴史の有用性の問題として、数学においては確率論の展開として発現し、多くの場合に深刻な論争の場を生み出した。言うまでもなく、これらの主張と論争は、共通の時代精神の個別的反映とみなしうる。こうした背景のなかにパスカル思想を置きなおし、その展開を蓋然性および確実性の問題との関連において跡づけることは、文学的・思想的研究として大きな意義をもつと思われる。

2. 研究の目的

筆者は17世紀フランスの思想家パスカル(1623-1662)を主たる研究対象としており、これまでに『パンセ』の思想的研究、同時代の護教論との比較研究、計算機製作体験の思想的意味の解明などを手がけてきた。また、『プロヴァンシアル』におけるイエズス会の道徳批判の検討においては、会士の良心例学と「蓋然説」に対する攻撃にあたり、パスカルが言及する「思慮(prudence)」なる概念に着目した。この「思慮」概念は、文脈の違いを超えて、時代の宗教論、護教論、政治論、証明論、確率論等々を架橋する鍵概念であると思われる。これについては、本課題以前の論文「『プロヴァンシアル』における「蓋然説」と「思慮」」(2009年)において、問題の端緒を示した。

本研究は、以上のような検討を踏まえ、パスカルとその前後の時代のフランスにおいて、蓋然性と確実性というテーマが文学、思想、宗教、政治、さらには数学をはじめとする自然科学の領域で顕在化していく過程を跡づけ、その歴史的意義と射程を解明することを目指す。

このため、まず個々の領域ごとに、パスカルを中心に周辺の著者を含む多様なテキスト(数学、自然学、計算機、道徳論、政治論、護教論)の分析を通して、このテーマの扱われ方を検討し、次にそこで得られた知見を踏まえて問題の総合化を図ることで、領域横断的な時代精神のあり方に関する、斬新な文学的・思想的研究を提示する。本研究は当初こうした目的のもとに開始された。

3. 研究の方法

近代の文学と思想における蓋然性と確実性のテーマについては、英語圏の研究者が先鞭をつけた感があり、(1)イアン・ハッキンの*The Emergence of Probability* (1975)、(2)バーバラ・J・シャピロの*Probability and Certainty in Seventeenth-Century England* (1983)、(3)ジェイムズ・フランクリンによる近年の*The Science of conjecture. Evidence and Probability before Pascal* (2001)などの研究が存在する。このうち(2)は対象を英国に限っているものの、方法論として学べるところがある。他の2著についても、特に自然科学面では大いに参考になるが、パスカル及び同時代の護教家たちや、政治思想論の著述家たちの再検討をはじめとして、補足すべき点は多々残っている。

本研究は、これらの先行研究を参照しつつ、17世紀を中心に、近代フランスの文学的・思想的著作、あるいは必要に応じて自然科学上の著述を検討し、蓋然性と確実性、さらには「思慮」の概念が、いかなる問題意識を持って登場し、取り扱われているかを考察して、背景にある時代意識を明らかにする。パスカル、モンテーニュ、デカルトら大作家のテキストを新たな観点から読み直すことは当然ながら、今日ほとんど読まれることのない護教論者たちの著述、リシュリユー周辺の政治論とその反対者たち、再評価の進みリベルタンの著述、さらには真空論争や確率論を中心とするパスカルと学者たちの議論を通して、彼らが何を確実とみなし、あるいはいかなる程度の蓋然性で満足すべきと主張したのかを、多角的に明らかにしていく。

4. 研究成果

(1) 発表論文概要

7点の論文および3件の発表を通して、およそ次のような成果を得た。

「パスカルと時間」では、パスカルの護教論が、死の切迫性を根拠として探求の必要性と合理性を説く経緯を論じた。

「パスカルにおける始原と中間(その1、その2)」と題する2論文では、まず護教論の重要概念たる「秩序(領域)」をとりあげ、安定したように見える「秩序」が、「起源」を問題とするや揺らぎ始め、その確実性が疑わしく見えだすさまを、「原理」と習慣、「原始語」と「幾何学の秩序」などを手がかりに考察した。続いて、パスカルの政治論を扱い、小品『大貴族の身分に関する講話』および『パンセ』中の政治論を、「始原」と「中間」という観点から再評価し、身分制や王制、法体系といった政治秩序が、その起源においては不確実と無根拠性を露呈し、正当性を揺るがされること、しかしそうした起源を隠蔽した状態でなら、「みごとな秩序」として相

対的安定を獲得することを指摘した。政治論に見られるこうした相反する二面性は、人間的認識や「幾何学の秩序」の場合と、コンテキストの違いを超えた類比性を示している。さらに、護教論の構成自体にも、同じ構図が当てはまる。パスカルの護教論は、無神論者折伏のために、全 27 章が有機的な連関をもって展開するという独自の「秩序」を示す作品であるが、認識論や政治論の場合同様、著作の「初め」と「終わり」において、いわばその無力を宣告され、著者自身、そうした護教的努力の結果獲得される信仰が「救いには無益」であると告白する。最終的に人間の心を真の信仰へと傾かせるのは神の業であり、人間的努力ではいかんともしがたい事柄なのである。こうして、幾何学も政治も護教論も、「愛の秩序」の確実性を欠いているが、にもかかわらずその「似姿」として、中間的・蓋然的秩序、人間に唯一可能な秩序であり、同時に肯定と否定の対象となるのである。

「計算機から『パンセ』へ 身体、習慣、機械 (1)」では、計算機開発の意味を、計算の身体化が演算結果の確実性を担保するという計算機の逆説、および秩序と侵犯という主題の発見に求め、次に、計算機と身体および習慣の関係を手がかりとして、『パンセ』における信仰獲得の手段としての習慣・理性・靈感の問題に接近を試みた。計算機においても護教論においても、元来蓋然的なものであるはずの身体と習慣が、理性以上に確実な演算結果と真正な信仰を与え得るといふ逆説に、我々は出会うことになる。

「パスカルと計算機 発明の思想的意味」では、秩序と侵犯、生半可な識者の批判、民衆の意見の健全、現象の理由等々、後年の重要なテーマ・用語・概念の多くが、既に最初期の活動たる計算機製作過程に見出されることを示し、この発明が決して孤立した一閉鎖領域を作るのではなく、パスカル思想の発展進化のなかに位置づけうるものであることを、従来の私見を一部修正・補強しつつ、一層明確に主張した。ここでも、計算機の使用である民衆の判断が、一見不確実に見えて、その実「理性的」な識者の意見より健全で確実であるという「逆説」が指摘できる。

「La machine arithmetique et les <ordres> pascaliens」は上記の論点を受け継ぎ発展させたもので、「秩序と侵犯」および「秩序の逆説」という計算機製作体験から生じた 2 つの主題が『パンセ』において演ずる役割を、「生半可な学者」と「民衆」というパスカル独自の概念を例にとりつつ明らかにした。初期の科学的業績から主著までを、「秩序と侵犯」という統一的観点から読み解くこうした試みは従来見られなかったものである。

「『パンセ』における「民衆」と「単純な人びと」」は、前記 2 論文をさらに発展させ、護教論結論部に登場する「単純な人びと」という概念をとりあげる。これもまた「秩序」とその「逆転」という思考法の応用であることを、モンテーニュ『エッセ』との比較を手がかりに論証した。これによって、『パンセ』が本論から結論にいたるまで、秩序の議論その弁別、侵犯、逆転に貫かれていることを示し、この議論こそがパスカルにおける確実性の問題を根底から規定している点を示唆した。

(2) 国内外における位置づけとインパクト

本研究はいまだ完成途上にあるものの、政治論、道徳論、証明論、護教論といった、広義の文学的・思想的領域を広く対象とし、種々のテキストを検討することで、いずれ多面的・包括的な時代精神の把握が期待できる。その一環をなすパスカルのケースにおいては、本研究によって、計算機の発明という初期の科学的業績から晩年の執筆になる『パンセ』までを、「秩序と侵犯」という統一的観点から読み解き、そこに確実性と蓋然性の問題に接近するための重要な手がかりを見出すことが可能になった。こうした研究は従来見られなかったものであり、フランスの雑誌に発表した論考(前記)を通して、国外においても筆者の主張が認知されることを期待している。

(3) 今後の展望

当初の研究計画に比して、現在までの公開論文はパスカル研究に偏ったきらいがある。パスカルについても、筆者独自の観点から、身体・習慣・「賭け」について論ずべきことが若干残っている。秩序の逆転が蓋然的なものを確実性に転化するという新しい視点、およびこの観点からする「賭け」の再評価は、今回は示唆の段階にとどまっているが、豊かな結実が期待できる。今後はこれ等の課題に答えるとともに、従来の筆者のパスカル研究を集大成することを期したい。

また、フランス国立図書館における 3 度の調査により蓄積した資料については、「思慮」の概念および歴史観の問題などに関し、まだ未消化で十分に活用しえていない部分があるが、「思慮」という切り口を導入することで、従来にない展望が開けつつある。リシュリュー周辺で、新しい時代の為政者に必須の徳として「思慮」が称揚され論じられたことについては、つとにシュトクリフ(1959 年)あるいはチュオー(1966 年)らの指摘がある。しかしそのリシュリュー派の代表的論客であり、同時に反懐疑主義の立場に立つ護教論者でもあるジャン・ド・シヨンが、政治論のみならず護教論においても「思慮」の徳を取り上げ、さらには 2 つの代表作(『二つの真理』、『靈魂不滅論』)において、少なくとも 7 回、「思慮」概念に依拠しつつ「賭け」の議論を

展開していることについては、いまだかつて注意が向けられたことがない。シヨンのケースは政治論、懐疑論批判、護教論という異なる領域における「思慮」概念援用のめざましい事例である。また、良心例学とその鬼子ともいうべき道徳的 laxisme が、「思慮」概念に依拠する側面を持つことを、慧眼なパスカルは見逃していない。こうした特性は同時代の多くの領域の思想家においても認められるものである。その特性は、蓋然性と確実性をめぐる、切実な時代意識の表れにほかならないからである。筆者は、こうした点の解明も今後の展望としている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

永瀬春男、『パンセ』における「民衆」と「単純な人びと」、岡山大学ヨーロッパ言語文化研究、33号、2014、pp. 11-26、査読無

永瀬春男、La machine arithmetique et les < ordres > pascaliens, XVIIe Siecle, no 261, 2013, pp. 669-683, 査読有

永瀬春男、パスカルと計算機 発明の思想的意味、流域、73号、2013、pp. 44-54、査読無

永瀬春男、計算機から『パンセ』へ 身体、習慣、機械 (1)、岡山大学ヨーロッパ言語文化研究、32号、2013、pp. 81-92、査読無

永瀬春男、パスカルにおける始原と中間 (その2)、岡山大学ヨーロッパ言語文化研究、31号、2012、pp. 33-47、査読無

永瀬春男、パスカルにおける始原と中間 (その1)、岡山大学ヨーロッパ言語文化研究、30号、2011、pp. 51-61、査読無

永瀬春男、パスカルと時間、Gallia、50号、2011、pp. 105-114、査読無

〔学会発表〕(計3件)

永瀬春男、パスカルにおける計算機開発の思想的意味、大阪大学フランス語フランス文学研究会、2013年3月2日、大阪大学文学部

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

永瀬 春男 (NAGASE HARUO)
岡山大学・大学院社会文化科学研究科・名誉教授
研究者番号：60135100

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし